

第一二話 冥王星狂想曲

今年のプラハにおける国際天文学連合の総会で兼ねてから噂されていたように、太陽系の第九番目の惑星である「冥王星」が矮小惑星としてその座から降りることになりました。

惑星としてその条件を十分に満たしていなければ止むを得ない事ですが、いままで七六年もその座について来ただけに、聊か残念で淋しい気がします。他の矮小惑星が、いずれも大口径鏡でないと見られないのに対して、冥王星はアマチユアが所持する比較的小さな器械でも観測され親しまれてきただけに、理屈はともかくとして例外として残して欲しかったですね。第一、発見者のトンボーさんに対して気の毒な気がします。カイパーベルト上にさらに存在する矮小惑星たちの発見と違って、冥王星の発見は世界の学俗界を揺るがす大発見であったはずです。そして太陽系の最果ての星を意味する「冥王星」という名が素敵です。学術的に硬いことばかり考えるのではなく、ユーモアも欲しかったですね。いま冥王星に向っているアメリカのロケットの中にトンボーさん

の遺灰が積み込まれているそうですが、冥王星発見者としての偉業は消え去るものではないと思います。

さてここでトンボーさんに纏わる誰も知らないエピソードを紹介しましょう。

あれは今からもう三〇年にもなりましょうか。イギリスのBBC放送が「宇宙の驚異」と題する映画を作製するために、世界中の天文台や学者を取材して回ったことがあります。プロデューサーとカメラマンたちは多くの機材を持って日本にも来たのですが、そのプロデューサーのAさんは、その頃アメリカのアダムスキー等によって広められた未確認飛行物体、即ちUFOの実体を探ろうと世界中の一〇〇人に近い天文家に会ってそのことを質問したそうです。無論天文学者はその存在を否定しました。ところが一〇〇人のなかで一人だけが「存在する」と答えたそうです。そしてその方は「自分の研究している天文台の上をよくUFOが周っている」と言ったそうです。そのUFOの存在を認めただ一人の天文学者がなんとトンボー氏だったのです。トンボー氏はローウ

エル天文台での勤務の傍らにRFTと称する特別に視野の広い反射鏡を自作して、この種の飛行体を搜索していたそう
で、Aプロデューサーの見たところ木製の四角い筒の中には
一二センチメートルの短焦点反射鏡が入っており、倍率は一
四倍。筒を抱くようにして椅子に座り天空をパトロールして
いたそうです。これを適当な架台に載せると、そのまま有力
なコメットシーカーになりそうです。そうですトンボーさん
は生涯の大半を太陽系の未知の天体の搜索に捧げた人だっ
たのです。